

戦死者追悼演説と哲学の言語

―プラトン『メネクセノス』と『ソクラテスの弁明』―

山 本 巍

一

「言葉(ロゴス)をもつ動物」とは何よりもギリシア人の人間理解であった。オイディプス王に対して予言者ティレシアスが「あなたが王であっても、言葉を返す権利は双方ともに平等でなければならない。わたしもまたこの点では自由だ。わたしはあなたの奴隷として生きているのではない」(ソポクレス『オイディプス王』408-10)と主張している。確かにギリシア人にとって人間とは、物を食べたり寝たりすることと同様に、市井の生活においても国政の公共空間においても言葉をもつて生きる、言葉をもつことを生きている生き方の動物のことである。言挙げしないことをもつてよしとした日本人とは些か違う。ギリシア人がアゴラ(広場)と弁論術を發展させたわけである。シンポジウムとして現代に伝わったギリシア人のシンポジオンとは、文字通り酒を共にすることであり、ただし酒(ワイン)を水で割って薄めて飲むのであって(そのための大皿の混合器がクラテールと呼ばれた)、つまり酔うことを求めたのではなく、あまり酔わないで言葉を共にすることを生活スタイルの中に組み入れていた。veritas in vinoとあるように、酒で日常生活の重力から解放されて言葉が弾むように、ということである。そして『オデュッ

セイア』はオデュッセウスをどのようにしようかを相談する神々の集会で始まっていたし、そのオデュッセウスは言葉の力で知略を発揮した英雄であつた。ギリシア神話に特有なことは他にもあるが、際立つことは「説得（パイト）」という名の女神がいたことである。そして「語ることににおいては恐るべきもの（δεινός λέγειν）」と評判のソピストたちが国際的にも活躍したギリシア世界である。アテネはこの言葉をもつ動物が民主制を生み出し花と開かせたギリシアの中のギリシアである。

ホメロスの言う「男が高い誉れを勝ち取る場所は戦場と集会」（『イリアス』9.440-441）とするギリシア社会であつて、行動（エルゴン）と言葉は車の両輪である。すなわち敵（外）に対しては行動、身方（内）に対しては言葉、である。そして戦場にあつては際立つた行動によって人は英雄的個人として立ち現われ、集会にあつては自らの考え、主張を論じ通して自分が何者であるかをハッキリとした輪郭のもとで顕現化させる。言葉に、集会という開かれた公共空間に物と事とを浮き彫りにする造形力をギリシア人は信じたのである。ここに行動を言葉でいつそう鮮明に顕現化する場面が生まれてきた。戦死者追悼演説である。「戦場と集会」「行動と言葉」という二極をめぐつていたギリシア社会において、戦死者追悼演説が国政の重要な一環となつたのである。公の場での弁論術の精華である。以降現代に至るまで、リンカーンのゲティズバーグ演説を初め⁽¹⁾、政治の一部になっていることは変わりがない。

ペリクレスの有名な戦死者追悼演説（ツキディデス『戦史』II.35-46）を擬した演説が大半を占める小編がプラトンにある。『メネクセノス』である。これは、アリストテレスの『弁論術』に二度（1367b8, 1415b30）言及されていることによつてプラトンの真正作品であること、および初期から中期にかけて（ほぼ紀元前三八〇年頃）書かれたことが大方のプラトン学者の意見の一致を見ていること以外は⁽²⁾、内容についてあまり触れられることがない。極めて特異な作品であるとか、哲学的な内容がないとか、プラトンの祖国アテネに対する厚い愛情を示している、と

いう位である。当時のアテネは財政逼迫状態にあり、戦死者の遺族扶養を減額する法律が提出されていたことへのプラトンの抗議とする見解もある⁽³⁾。あるいは逆に、ペリクレスの演説をパロディ化しただけで、プラトンが真面に書いたかどうか疑わしいともいわれた。しかしプラトンに無意味な冗談は一つもない。といって「余り」真面目にとるのも当たらない。以下ではこの作品を言語の働きから見てみたい⁽⁴⁾。その際、『ソクラテスの弁明』を少し手がかりにする。

「戦場と集会」「行動と言葉」という二極構造のギリシア社会において、アテネの習慣となつた国葬での戦死者追悼演説を誰がするかは人々にとつて重大であり、常に関心の的であつた。そして青年メネクセノスがそれを議事堂に調べに行つたことが『メネクセノス』の発端である(234a7-b)。従つて主題は追悼演説である。しかし「アゴラからかね、それとも他のどこから来たのかね、メネクセノス」とソクラテスが問いかけることが『メネクセノス』の第一行目であり、冒頭の単語アゴラが象徴する公共空間での政治が先ず第一に指標され、同時にプラトンはソクラテスをしてメネクセノスに対して、「教育と哲学は完成に達したと思つて、もつと大きなこと⁽⁵⁾(国家のこと『政治』)にもう十分向かえるようになっていゝと考へていゝのかね。そしてそんな若さでわれわれ年寄りを支配しようというのだろう」(234a5-b)と言わせていることから分かるように、隠れた主題は、哲学と政治(その本質は「支配すること」(ἀρχεῖν))、哲学の言語と政治に参画する弁論家(ἡγορεῖν: 235c5)の言語の対比である。戦死者追悼演説をポジとし、これと対照するネガとして哲学の言語を浮き彫りにすることがプラトンの戦略であつたことを以下に示そうと思う。『メネクセノス』が内容がないとあまり注目されなかつた訳である。

二

パルテノン神殿を初めとする建造物を作り、法律など諸制度を整備し、ギリシア世界にも人類史にも燦然と輝く

アテネの黄金時代をもたらし、「名前は民主主義だが、その実質は卓越した一人の市民による支配」(ツキディデス『戦史』II, 65)と言われ、アテネの栄光とまで讃えられたペリクレスが、陸の覇者スパルタに対し自ら戦端を開いたペロポネソス戦争第一年度の国葬でした戦死者追悼演説は、言葉の限りを尽くして作られており、現在でも読むものをして感嘆せしむるものである。当時の人々を感動させたことは間違いない。言葉の政治力である。

しかし人が死んだとすれば、その原因如何によらず、骨肉を奪われた家族、親しい人にとってそれは癒しがたい傷である。今日があれば明日があるのが自然であり、時間は持続の時間であるのに、どんな死もその人の「明日」を奪う限り、死は持続が絶たれて突然であり不自然であり暴力である。そして死者は還らず、である。葬式に出席して覚えるある困惑の理由がそこにある。肉親を亡くした人に言葉で何を言っても、言葉は空しく響くだけであることは誰でも知っている。ペリクレスもそれは承知している。「もとよりあなたたちの悲しみを除くことがむずかしいことは、わたしにもよくわかっていて」(ツキディデス『戦死』II, 43)と。しかし何か言わなければならぬ。何を言っても無駄であつても、何も言わないでいいのではない。そこで出てくる言葉が紋切り型になる。「ご愁傷様です」などはその典型である。戦死者追悼演説は、死が決して私的ではなく公の死であり記憶されるべき死であることを強調して、レトリックの限りを尽くした言葉の過剰な紋切り型、といえようか。ところがそれだけではなかった。ソクラテスは戦死者追悼演説は大したものではないし、即席で作することも難しくないと断言する。

戦死者追悼演説の目的は最初からハッキリしている。葬儀という行事によって(ἐπιτάφιος)戦死者は公には国家によって、私事としては家族によって行くべき旅路に送られ(396d4-6)、しかし埋葬が終わって、残された飾りを言葉で与えること(δῶρεα)、すなわち立派な業がなされたのだから、美しく語られる言葉(λόγος)によって聞く人にその行為の記憶と飾りが生まれるように(eiς)、ということである。従って戦死者を十分賛美することと生ける者への暖かい激励を送ること(子供、兄弟にはその徳を見習うべきこと、父母には慰め)である(33-273a1)。「語るべき

こと」は既に決まっている。自分たちが「何を聞くか」ということも人々には周知のことである。このハッキリした目的に合わせて、課題は「どのように語るか」に尽きる。そしてそれについて二つのことが言われる。「その場の思いつきで無造作に、ではなく(*οὐκ εἰς τι*)、長い時間をかけて準備した言葉」(234c5-6)によることと、その目的のために効果的に言葉を調節する、即ち(名としての)言葉で色づけて(*τοῖς ὀνόμασι ποικιλιώτερος*)この上なく美しく語ることである(235a1-2)。ところがこれは『ソクラテスの弁明』(17b8-c4)でソクラテスが自分の裁判に際してやらないとしたことなのである。その時その所のあり合わせの言葉で無造作に語るとし、弁明を効果的ならしむよう調節し(*κεκοσμημένους*)、美しく飾り立てた(*κεκαλῆσθημένους*)言葉は使用しないとしたからである。しかしそれは後に見ることにする。

さて「何を語るべきか」が決まっております、それを「どのように語るか」だけが課題であつてみれば、「どのように語るか」の準備が可能であるし、また効果狙いのためにも準備しなければなるまい。「何を語るか」は決まっております、「どのように語るか」は本番で語ることと準備で語ることが区別されうるからである。しかし「何を語るべきか」が決まっていなければ、「どのように語るか」の準備など不可能である。(因に、芥川龍之介は人生を「狂人の主催に成るオリンピック」と譬えたことがある(『侏儒の言葉』「人生」)。人生は人生の準備も練習もなくいきなり本番そのものが始まっているからである。人生は「生きること」＝「生きること」を探究し学ぶこと」という構造である。それでも「狂人の主催」であつたらうか。)

そして「どのように語るか」の定型も概ねできている。前半の戦死者の称賛は生まれ、国史、養育、武勲と進み、後半は国家の配慮と遺族への励ましと慰めに進む共通の題材、形式があつた。何人もの著述家がその題材について、あるは拡張し、あるは縮小しながら、細部にまで展開している。こころがける課題はその定型に載つて「どのように語るか」である。弁論術が幅を利かせるわけである。

ところで戦死者追悼演説が「何を語るか」の目的がハッキリしている意味で、最初から結論が出ているといつてよい。その結論へ向けて効果あらしむべく言葉がどのように収斂していくかが唯一の問題だとすらいってよい。その意味で自己完結型の言語である（「あれかこれか」とつつおいつ思考する探究型言語に対して）。そして既に「どのように語るか」の定型も決まっている。容易なわけだ。しかし「何ら大した (*μέγα, cf. μέγιστο. 234a6*) ことはない」(235d6) とソクラテスが言う理由はまだあった。

戦死者追悼演説では戦死者に賛美の言葉を捧げるだけで、個々のことは実際に「当たっているかないか」を問わない(234c6-235a1)といわれていた。たとえつまらぬ人さえ(234c4)、あることないこと言つて讃えられるのである。真偽が問われるのは記述 (description) であるとすれば、ここでは評価 (evaluation) の言葉しかないのである（「美しく語る」）。真偽を閉め出した意味でも閉鎖系の言語性格を現している（偽を閉め出した言葉は真からも閉め出されているのだが。単なる「名 (*ὄνομα*)」としての言葉！）。感想を述べることに似ている。感想は長くても短くてもそれ自体で完結している。

実際ペルシャ戦争についてはヘロドトス『歴史』と齟齬する点がある。例えば、ダレイオスが勝手な口実でギリシアに侵攻したとあるが(240a)、アテネとエレトリアが先にサルデイスを焼いたのであり、マラトンの戦いではアテネだけで戦ったとあるが(240c)、プラタイアの援軍があつたし、何よりもテルモピレーの戦いではスパルタ軍が全滅するまで死守したことには触れていないし、サラミスの海戦もギリシア連合軍三七八隻(内アテネは一八〇隻)で戦ったことも書かれていない⁽⁶⁾。それ以外にも、(アテネの外は)ギリシア人の誰もエレトリア人を助けなかったとあるが(240c)、ヘロドトスを信じる限り、実際はエレトリア人が相共に破滅しないようにアテネに退却することをお勧めしたので退却し、エレトリア在住のアテネ人が参戦したのみであるし（『歴史』VI, 100）、アテネを助けたのは唯一スパルタ人だが、それも一日遅れて到着したとするが(240c)、それでも二〇〇キロを三日で駆けつけたこと（『歴

史』VI, 120)は触れていない。しかしもとよりこれは作者プラトンの不注意ということではない。またソクラテス
 がその演説の中で(245c3-4)、ソクラテスの死(紀元前三九九年)の後の出来事つまりアンタルキダスの和平(三
 八七年)に言及していることを、プラトンのアナクロニズムと批判する向きもある。しかしプラトンが対話篇とい
 うドラマ仕立て書いたこと、そして作者プラトンと登場人物は違うことを見失ってはならない^(?)。本当に当たって
 いることもそうでないことも戦死者追悼演説では語られることを、作品の外にいる読者に対して「示す」ためであ
 る。戦死者追悼演説に際立つて現れる、演説の言語性格を実演で示すことにある。即ち演説は「どのように語るか」
 を中心にして、一方で演者には語ること、そして他方で人々には聞かれることのみ要求し、「何を考えるべきか、わ
 れわれに思索を命じるのは何であるか」は考えない。従って真理に関わろうとしない限り、真偽を問ひ吟味する機
 構を内蔵していないのである。そして戦死者追悼演説では取り分けそうである。なぜ？

三

家であれ会社であれ国家であれ、どんな共同体でも、複数の構成員からなる共同体である限り、共同体はその内
 においては「多」であり、その外に対しては「一」である。従って共同体は外に対しては一つの共同体であり、そ
 の構成員はそれぞれが当の一つの共同体を代表するものである。共同体とその構成員との関係はその共同体の中
 の問題である。それが崩れているときは、その共同体が共同体になっていない状況であり、不調和、内紛が支配して
 いることになる。以上のことは人間(の身体)でも同様であって、人間が頭や手足そして心臓等の内臓や骨肉から
 複雑に成り立っていても、一続きの皮膚で覆われ、その「中」は見えない。そして普通は当人も見たり聞いたりを
 齟齬なく行い、自由自在に手足を使つて振舞っている。そうであつてこそ誰に対しても一人の人である。われわれ
 が手足を手足と意識し、目を目と意識し、胃を胃と意識するのは、そこに何か不具合が起きたときである。パソコ

ンのキーをうまく打てなかったり、足がもつれたり、目がよく見えなかったり、胃が痛んだりするときである。不調和が身体の中に生じたのである。四分五裂の始めである。

不調和や内紛が共同体に起きれば、共同体の体をなさない不健全な状況に近い。身体の不調和は医者が内側から治療するが、不健全な共同体がもつて「一つ」の共同体に戻る端的なケースがある。戦争である。戦争は共同体の外に敵が生じることで、内が内として固まるからである。こうして戦争は外に対して内を内として構築し固める何よりのメカニズムを持っている。それまでもすれば内側がバラバラであったものが、いざ争いになって一致団結して一つのもの（一つの家、一つの会社、一つの国家、一つの同盟）に凝結する例は歴史にも日常にも夥しいほどある。宇宙人に攻撃されて俄に地球防衛軍が活躍するSFも多い。このように戦争は社会閉鎖系を構成する働きの何よりの代表である。古代ギリシアでは居留外国人、半外国人（片親だけが自国民）などは通常は市民として扱われることはなかったが、自国民の兵士に不足が生じたときはその穴埋めをするべく、市民として認めるのであった（アリストテレスは純粹民主主義と新しい市民を組み込んだ拡大民主主義について『政治学』III,5;IV,4で言及している）。内紛、内乱はどちらが勝っても癒しがたい致命傷を共同体に残し、従って内乱はそれが起きること自体が共同体崩壊の兆しなのである。しかし戦争はそれが「外」に対するものであるがゆえに、敗北になれば消滅の憂き目を見るかもしれないが、勝利すれば共同体は自己同一性を護り、さらにいつそう強化拡大させることができる。

アリストテレスは国制（*politeia*）をよい国制とその逸脱形態に分類し、その支配権者の数で単一支配、少数支配そして多数支配に分け、六通りの場合を示した。つまりよい国制は支配者が国家全体の共通の善を第一に配慮する国制であり、逸脱形態は支配者自身の善を狙う国制であって、これは僭主独裁制／寡頭制／民主制であり、これに対応するよい国制は君主制／最善者支配性（貴族制）であり、民主制に対応するものを「国制（*politeia*）」と呼んでいる。つまり類に当たるものと種に当たるものとが同じ国制と呼ばれているのだが、民主制が国民みんながそ

それぞれ自分の善・利益を追い求めている多数者支配である（従って民主制国家は「一つの」国家なのではなく、その実、バラバラな国民の数ほど国があるといつてよく、多数の国家の集合体に過ぎない）のに対して、よい多数者支配の国制としての「国制」は、国民の多数が国家共通の善をみんなで第一に配慮する体制である。しかしアリストテレスはこうした「国制」が望ましいと思いつながら、その実現性が薄いことも認めている。徳は一人一人の完成を目指す、多数のものが多数のものとして充実完成するのは困難だからである。従って成り立つとすれば、戦争のような場合と但し書きしている（Pol. 1279a40-b2）。確かに戦争のときは、誰でも国家全体の帰趨を思い、国家共通の善を自分の善・利益より先に置くものである。「欲しがりません、勝つまでは」である。アリストテレスも「戦争は人々に正しくあり節制を保つように強いる」（Pol. 1334a25-26）と言っている。こうして「外」に敵がいる場合こそ、内は一つにまとまり結束する（挙国一致）。国内に不満が渦巻き、内紛になりそうなとき、往々にして国家は戦争を仕掛けるのである、正義の名の下で。目を外に逸らす事例は人類の歴史に多く残っている。

戦争は敵味方を作る。内と外である。生命の危険を冒して外と戦う戦争にある限り、明々白々に内は外に対して内であり、しかも内としての統一性が強固にされる。そこには「外国人（*ξένος*）」がはいる余地がない。外国人は外にだけである（在留外国人（*μέτοικος*）は市民権がなかった）。それは、アテネにとって最初はペルシャ人であった。「われわれギリシア人」である。「土地のもの（*αὐτοχθής*）」（377b6）、「外国人嫌い（*μισοξένης*）」（245c7）、「外国人の血が混じつてな」（*ὁὐ μετέοβαί βαρβαροι*）」（d4-5）とその純粋さが強調されていた。Barbaroi とは文字通りギリシア語を解さないものたちへの（ギリシア人からする）蔑称であった。しかし「われわれギリシア人」も共通の敵に対しては身内であったが、やがて内紛が起されればそれも内と外に分裂する。スパルタに対する「われわれアテネ」である。つまりペロポネソス戦争である。こうして内は外に対して一つのもの、統一体であることを最も明らかにする自動装置が、戦争であった。外の敵と戦っている限り、「われわれは一つ」である。「公共的」（*κοινόν, κοιν*

η 241c5, 242d3, e3, 243b5, 249b4) և ինչպէս「私的」(ιδιω, ιδιᾱ: 242d3, e4, 243b5, 249b5) և ցոյց տալով、内の中の話である。

こうして戦死者追悼演説は、人々の間に異なりなき自己同一性の支配する国家閉鎖系の内で、内のために、内に向かって語られる言語になる。そしてそれが戦死者追悼演説が容易である最大の理由であった。ソクラテスは、スパルタでアテネの人のための追悼演説をするのとは訳が違う、と言っている (235b2-4)。そしてアリストテレスが二度まで引用しているのは正にこの箇所である。戦死者追悼演説が何よりも自己閉鎖系言語であって、勢い自国にとつてのよい市民の話に傾く以外ではない。外国人(他者)は閉め出されている。その結果、自己回帰型であることがさらにつけ加わる。

四

人が自分の恋人を賛美するでしょう。それはある女性を賛美するのとは全く違う。「ある女性」は多くいる女性たちの中の「一人」であるが、恋人はその人の唯一の恋人である。一对一のかけがえなく緊密な結びつきである。第三者はそこに介入する余地がない「二人だけの閉鎖系」である。そうしたとき、人が自分の恋人を賛美するとすれば、恋人の賛美は反響回帰して自分を賛美することに他ならない。すばらしい恋人を恋人としている自分の賛美でもあるからだ。「わたしの彼を見てください」とは「こうしたわたしを見てください」と誇らかに響くことになる。恋人賛美の言葉が「二人だけの閉鎖系」の中で反響して自分に降りかかるからである。『リュシス』でヒッポタレスがリュシスへの恋心を詩や歌にして人に聞かせるのに対して、ソクラテスが恋人賛歌は自分自身へ向けられていると注意を促している (205d6, e1)。そしてソクラテスは、賛美されると人は尊大になつてそれだけ厄介になると付け加えることを忘れなかった (206a3-7)。

戦死者追悼演説は、それと似て、自己回帰型閉鎖系言語である。自国民の勇氣ある戦死を称えることは、その人々を身内とする自分たちを称えることになる。聞いて快いわけである。従って聞くのが一般の国民である限り、演説がその目的に向けて効果的であるためにはあとう限り一般の常識に沿ったものであった。アリストテレスが言う如く、「誰でも自分の慣れ親しんだ方式で語られることを要求する」(Met. 994b32-995a1)からである。『メネクセノス』でのソクラテスの演説が常識つばく、哲学的深みも何もない(そこからプラトンは本気でこれを書いたのかという疑問が生まれた)、と評されるのもむべなるかな、である。

しかしなぜ人は称賛され、賛美されると尊大になって扱いにくくなるのか。誰か他人が称賛されたり、何かよいことに恵まれたりすると、その人が自分と「等しい」と思っている場合、人間は嫉妬を覚えることになりやすい。嫉妬は、自分と同じようだとしている他人が何かよいことに恵まれることを目にして、こころに痛みを感じることだからである(Rhet. 1387b23-25)⁽⁸⁾。同じであるのに、違うことが許し難い、ということである。嫉妬は人間の心理に広範に現われ、また実に根深い。しかし嫉妬が単純に嫉妬として発現することはまた稀ともいえる。義憤という化粧をまとうからである。義憤は、他人が本当はそれに値しないのに何かよいことに恵まれていることを目すること、こころに痛みを感じることである(Rhet. 1386b10-11)。正当な価値に反して恵まれることは不正であり、不正に対して怒ることは立派なことである。さて他人がよいことに恵まれ、称賛される。本当にそれに値する？ それはちよつとおかしいのではないか？ などと、少なくとも疑問の回路を通ることが多いであろう。嫉妬が義憤の顔を一瞬見せるのである(ただの嫉妬が義憤の顔をしつづけることもある)。自分のこころに感じる痛みを何らか正当化しようとするからである。真実のいかにありや、という関心が一瞬であれ見せかけであれ、こころによぎるのである。

パスカルは「人間は人間の理性を高く評価しているので、いかに地上で優越した地位を得たとしても、人間の理

性の中で同じく優越した地位を占めない限り、満足することがない」として、名誉を追求することを人間最大の愚劣さであり、かつ優秀さの最大のしるしとした（『パンセ』*§106*）。人が他人から称賛され名誉を得ることを喜ぶわけである。こうして人間が名誉心に甘えるのは、甘えることができる仕掛があることによる。自分の卓越性が他でもない人間理性によつて承認されようからである。しかし他人から称賛されることは異をもっている。それは、自分がその称賛にふさわしい、自分に価値があることは本当のことだ、と何の疑問の回路もなく何の吟味もなく思い込むことである。ソクラテスは称賛されて「即座に以前より大きく立派で美しく成ったと考えてしまふ」（*235b1-2*）と言っている。尊大になるわけだ。それは、真実のいかにありやをヤスリにかけて吟味探究すること抜きで結論だけを受け取る、「言即事」を思わせる魔法であり、他人の理性の承認があるゆえに、自分の理性を使用しない異である。理性に権威があるとするゆえの自動操作であり、それとは気づかぬ逆理である。人間は考える存在である。考えないのではない。しかし既に考えられていると思うから考えないのである。いかなるものにも囚われない自由の爽風はそこにはない。みんながもう問題はないと言うただそれだけの理由で自分もはや考えなくてもよい、とは決してしない幼いまでの真率さが、その対極にある。「ソクラテス以上に知恵のあるものはいない」という神託さえソクラテスに沈黙を強いることができなかった。

以上のことからすれば、「名前は民主主義だが、その実質は卓越した一人の人の支配」と言われたペリクレス指導下のアテネが、彼の卓抜とした弁舌と強力な政治力、そして公私の区別も厳しく、ツキディデスから「極めて清廉な人」（*II.69*）と呼ばれた人柄とあいまって、一種の父権制の様相にあったことが見失いがたい。アテネ黄金期であり民主制がもつとも花と開いた時期に、市民が自立した個人としての人間でなかったのである。追悼演説と同様に、ペリクレスが起した公共事業による、パルテノンを初めとする絢爛豪華な建造物がアテネ市民にとって自分たちに対する称賛の言葉に響いたこと、現代と変らない。

プラトンのペリクレス批判は鋭い。ただし直接的批判ではない。戦死者追悼演説は実に易しいということ以外にもある。ソクラテスが実演してみせた演説もその実ソクラテスが前日アスパシアから聞いたものだとし(235e4-236a8-b6)、ペリクレスの弁論の粹とも見えたあの戦死者追悼演説自身がアスパシアの教えたものだとしたのである(235e7, 236b5)。そのアスパシアは誰であろう、ペリクレスの内妻であり、その前身は小アジアはミレトス出身の高級遊女であり、才色兼備の女性であった。戦死者追悼演説は、既に見たとおり国の内において内に向けた、男による男のための演説であったが⁹⁾、それを外国人(ξένος)の女性が創作した、とプラトンはしたのである。プラトンはワザワザ「異国の」ミレトスのアスパシア(249d1)と事改めて紹介している。ペリクレスの追悼演説に勝るとも劣らない演説をソクラテスが展開してみせ、それがアスパシアから聞いた話であったことを最後に改めて教えられ、青年メネクセノスは「女でありながら」と驚いて(249d4)、ソクラテスに窘められている。

そして追悼演説が本人の手柄であることもないことも美しく語る(234c6-235a1)としたように、プラトンが示したのは、ソクラテスもペリクレスも自分の演説の言葉ではないことを自分のもののごとく語ったことである(236c4で「彼女の言葉」、249d1で「アスパシアの言葉」と繰り返している)。もっともソクラテスは「自分自身では何も知らない」(236a8)と最初に自白していた。

つまりアスパシアから「聞いて」語ったのである。決まった目的狙いで、追悼演説の定型に載って「どのように語るか」ということは、「聞いて」語るほどのことであった。従って「忘れない」ということが重要ではあったろう(236c1)。しかしそれはものを考えるということであつたらうか。考えることはすでに終わっていたのではないか。考えるとは、「考えるべきことは何か」を考えることでないのか。弁論術と弁論の政治力はある目的に焦点を当てつつ「どのように語るか」の効果狙いに集中し、人々はそれを受けて聞くだけであり、そこには本当はどうなっているかをおよそ考えることがないこと、それを弁論術の典型である戦死者追悼演説が至極易しいことの分析を通して、

プラトンは示してみせたのである。「考えるべきことは何か」を考えることは難しい。しかしそれは偶然の不運によって困難というのではないし、従って何かの状況下では容易になるということがない。それにもかかわらずそこを措いて、真実の有り様はいかに、へ至る道はない。残された若者への励ましとして、先祖の名譽ではなく、自分自身の力で新しく名譽を獲得するよう激励するけれど、それも先祖の名譽の延長上のことでしかなく、既存の価値、既知の生き方の拡大強化である(247a2-b7)。こうした枠組みそのものを新しく吟味検討することが何もない。実演された追悼演説が一つの完結した「物語」の性格を持つ所以といってもよい。そしてメネクセノスの最後の言葉は「もっと聞きたら」(249e6, cf. 236c7, Cleit. 408c4) であつた^[51]。

それではしかしなぜ『メネクセノス』という題名あるいはその名の登場人物をプラトンは選んだのだろうか。P. M. Hubyは、メネクセノスが公の仕事に就く伝統の家柄であり、また最近名声を博した將軍カブリアスに連なる人間であるので、それだけ一般にアピールできるとプラトンが考えた、という可能性を挙げている^[52]。それも可能性ではあろう。しかし一般の人にアピールする弁論の政治力を考察の俎上に載せる本篇で、一般にアピールすることをプラトンが狙つたであろうか。だとすればプラトンはよほど頭が単純かよほど皮肉屋である。

既に言及したように、ソクラテスの演説が終わつた直後、ソクラテスが「君に語つたこれが、メネクセノスよ(ὁ Μενέξενε)」、シレントス出身のアスパシアの言葉だよ」(249d1-2)と言つたとき、「メネクセノス」という名は「メクセノス(μὴ ξενός)」つまり「異邦の人ならざる、外国人のいない」と響いたのではなからうか。それは、既に始め近くでソクラテスが「わたしは、メネクセノスよ(ἐγώ γε, ὁ Μενέξενε)」追悼演説ですっかり偉くなつたと思つて」と言つた(235a6)の直後「いつもわたしと共に外国人が何人かいるのだが(αὐτὸν ἐμὸν ξένον) (b3) と言つた対照の中にも暗示されていたのではなからうか。「メネクセノスよ」という呼びかけの言葉は、後235e3にあるが、そこでも演説の先生がいるとアスパシアを紹介する箇所であつた。そしてその後絶えてなく、249d1である。そしてさ

らに追悼演説の種明かしを「われわれ二人だけだから」(236d2, cf. Cleit. 406a10) するが、外に漏らさないように、とソクラテスがアスパシアを憚って(というよりも、むしろペリクレスのためを思つて)注意する際、「外に漏らす」という動詞は 249e3 では *ἔκρυπται* ではあるが、236c4 では *ἐκρύπτομαι* なのである。すなわち「エクセネンコ」である。これらのことは全て言葉の響きが「クセノス」がらみであつて、「メネクセノス」という名前と相まつて戦死者追悼演説の言語性格・言語空間を示しているように思えてならない。例えば、『国家』でポレマルコスが「戦いを仕掛けるもの」、トラシユマコスが「戦いにはやるもの」、グラウコスが「輝くもの」、アディマントスが「怯まないもの」と響いて、作品の中での登場人物の性格を名前が背後から暗示するように、プラトンがあらゆる作品で語呂合わせを使用するのも、言葉と言葉を擦り合わせ、言葉と言葉を反響させ、もつて言葉の、そして思考の可能性を可能な限り開こうとしたことによるのを見失つてはならない⁽¹²⁾。思考は「真剣な遊び」なのである。

五

ところで『ソクラテスの弁明』である。「アテナイ人諸君」とソクラテスが呼びかけることで始まる『弁明』でソクラテスが語る言葉は、アテネの人々には「異国風に (*ξένως*)」(Apol. 17d3, cf. d4, *ξενώτερον*. Met. 995a3) 響いた⁽¹³⁾。常の裁判のように法廷弁論として馴染みの言葉では語らず、人々にアピールできるように調節してない、その時その場での有り合わせの言葉で無造作に、つまりソクラテスがいつもやっているのと変わらない言葉で単純愚直に弁明するとしたからである。『テアイテトス』172d-173c でプラトンは法廷弁論が現実の諸条件から縛られる制限があるとし、時間制限、何でも話していいのではなく、手続きにそつて話すという言論の自由の制限、裁判官・観衆の監督の目、そして何よりも裁判は勝負事のように勝たなければならない、という縛りを指摘した。その通り、裁判は絶対に勝たなければならない。現代でも弁護士がそのためにいる。こうして勝つために、という目的に合わ

せて法廷弁論は効果あるように調整されるのである。しかしソクラテスは自分の裁判において、この戦術を取らなかった。なぜ？

裁判に勝つために調節した言葉はそれだけで人を欺く性質の言葉になるとしたからである。相手に効果的にアピールできるように仕組まれた言葉は、それが効果的であればあるほど、弁明が正しいか正しくないか、その真偽を相手が自分で自由に考え判断することができないように縛るからである（無縄他縛）。ソクラテスは自らを「自分で推理し判断して最善だと思える言葉以外の何物にも従わないような人間だ」（*Crit.* 46b4-6）としたが、その同じことを他の人にも認め、あるいは求めた。ソクラテスが恐れたのは、何にも囚われない自由の遂行としての「考える」ことを失うこと（*zōōnōtos*. *Apol.* 37c7）である。従って死刑の求刑に対する反対提案として常の裁判のように国外追放を申し出れば、それは「命惜しみ（*philophytia*）」になるが、しかしソクラテスが死の危険に直面してなおその提案をしなかったのは、命惜しみの反対であり、かつペリクレスおよびソクラテスの追悼演説が称揚した男らしい勇気という徳（*Menex.* 243c1, d1, 246e1, 247a1）の故ではなく、国外に出てそこで生きた時、何が起きるかを推理する思考力であった。

こうしてソクラテスの要求することは単純に、「弁明が正しいかどうか、正にこのこと自身に理性の眼差しをやり、考察すること、これが裁判官の徳であり、真実を語ることが弁論家（*ōpōpōs*）の徳である」（*Apol.* 18a3-6）とした。それに対し、ソクラテスが使わないタイプの言葉として先に引用した *kekalmēnēnōtos* (*Apol.* 17b9. 美しく飾り立てた) と *kekōsmēnōtos* (*Apol.* 17c1. 調節した) の完了形は、「予め準備して仕上げた」との意味であって、それだけ目的実現のための「思い煩い」の姿である。追悼演説も「思い煩い」であることはすでに明らかであろう。アテネの土地の人々の中で独り「異国風に」見えたソクラテスは、ここが最善であるように気を配る以上に、身体と金と名誉と威信に気を配ることがないように、人にも勧め自分でも努め（29d8-e2, 30b2）「こうして」「一番大

事なこと（善美のこと）」（22d7）をめぐる「人間的知恵」（20d8）を求めて生涯を生きた。そしてこの裁判で死刑の求刑に対する反対提案として、国家に尽くした榮譽として国家迎賓館での食事を申し出た（それが市民の憤慨と反感を掻き立てて、一挙に三六一票の死刑賛成票となったのだが）。しかしそのことは、一つの逆説、すなわち国家を超え生活の大地を超えて初めてよい市民たりうることをも「示して」いたのではないか。あたかもそれを受けたように、アリストテレスは、最善の国家においてのみよい市民とよい人間は一致するとしている（Pol. 293b3-7）。

ソクラテスの戦死者追悼演説の中で「自由の父、自由の守護者、高貴で自由な気風」（Menex. 240e2, 244c7, 245c7, cf. 239a5, b1, 242a7, b6, c1, 243a2, 245a3, 246a1）と口を極めて謳われたアテネで、「土地の生まれ」であること以上に自由に哲学することを許したアテネで、神の兵士として（Apol. 28e4, cf. 30a5）いかなるものにも囚われない自由を証し、死んだのがソクラテスであった。しかしその証しの言語は、追悼演説とは事変わって、聞く人を慰撫するものではなかった。プラトンが『ソクラテスの弁明』として作品化した「ソクラテスの裁判」が、「アテナイ人諸君！」（Apol. 17a1）に対する「ソクラテスによる裁判」でもあったからである。ソクラテスのあの審判に合格したのは「無罪投票した人」（39e1）、即ち「裁判官諸君！」（40a2）であった。さて、ソクラテスの裁判に対し、君は有罪投票しますか、それとも無罪投票ですか⁽¹⁴⁾。

（二〇〇〇年十一月十三日）

註

- （1） リンカーンの演説とペリクレス以来のギリシアの演説の結びつきについては、G・ウィルズ『リンカーンの三分間』（北沢栄訳、共同通信社、一九九五年）が面白い。リンカーンは言葉を切り詰め、簡潔に二七二語で締めている。その一部が有名な「人民の、人民による、人民のための政治」である。因みに全文を挙げれば次のとおりである。

Four score and seven years ago our fathers brought forth on this continent, a new nation, conceived in Liberty, and

dedicated to the proposition that all men are created equal.

Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation so conceived and so dedicated, can long endure. We are met on a great battle-field of that war. We have come to dedicate a portion of that field, as a final resting place for those who here gave their lives that that nation might live. It is altogether fitting and proper that we should do this.

But, in a larger sense, we can not dedicate—we can not consecrate—we can not hallow—this ground. The brave men, living and dead, who struggled here, have consecrated it, far above our poor power to add or detract. The world will little note, nor long remember what we say here, but it can never forget what they did here. It is for us the living, rather, to be dedicated here to the unfinished work which they who fought here have thus far so nobly advanced. It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us—that from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they gave the last full measure of devotion—that we here highly resolve that these dead shall not have died in vain—that this nation, under God, shall have a new birth of freedom—and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.

- (2) cf. W. K. C. Guthrie, *A History of Greek Philosophy* 4 (Cambridge, 1975), pp. 312-3, R. Kraut ed., *The Cambridge Companion to Plato* (Cambridge, 1992), pp. 102-3, 112.
- (3) P. M. Huby, "The Menexenus Reconsidered," *Phronesis* 2, 1957, pp. 107, 113.
- (4) 『ソクラテース』プラトーン著、ズリッソスが公共工事を盛らぐこと、プラトーン市民を喜ばせ、しかるその欲求を膨らませただけで、苦しい真実を詳細に示さなかった等の批判をこけてゐるが、『メネクセノス』はこれを受けたものとして、積極的直接的なズリッソス批判と読んだのか？ S. S. Monson, "Remembering Pericles: The Political and Theoretical Imposit of Plato's Menexenos," *Political Theory* 26, 1998, pp. 490-508 がある。本稿は言語の働きから分析している。
- (5) 234a6 の *τὰ μείζονα* は Euthyd. 273c4 の *μειζόμενα* と対応している。
- (6) 津村寛二訳者解説（プラトーン全集第一〇巻、岩波書店、一九七五年）二四六—七頁参照。
- (7) 対話篇という作品構成をめぐる問題点については拙稿「鉄の孤独と対話問答法—プラトーン『大ヒュプス』」（『ロコスと深淵—ギリシア哲学探究』東京大学出版会、二〇〇〇年）、五一—八頁参照。

- (8) 嫉妬については、拙稿「一」と現実」（『ロゴスと深淵』）二四二—四頁参照。
- (9) 演説の中でも、残された子弟たちが徳を修練し（246e1, 247a1）と言われるギリシア語の徳 *ἀρετή* が *ἀρετή* すなわち戦争の神に由来し、英語の *virtue* はラテン語の *vir* すなわち男に由来する。
- (10) ソピストの言葉がもつばら「話す言葉」であり、聞いては答え答えては聞く対話問答の「われわれ二人言語」とは違って「自分一人言語」であり、人々はというと、もつばら「聞く人」であつて、さらにいつそう聞きたい、と聞くことに縛られ、しかもそう縛られていることにほとんど気づかない、ということについては、拙稿「聖書の言語宇宙—ソクラテスとイエス—」（宮本久雄、山本巍、大貫隆『聖書の言語を超えて』東京大学出版会、一九九七年、八一—一六頁参照。対話問答法の構造については、拙稿「ソクラテスの対話問答について二、三のこと」（科学研究費報告書『対話と論争における合理性の起源と構造に関する研究』、天野正幸代表、二〇〇〇年）参照。
- (11) op. cit. p. 113.
- (12) プラトンの語呂合わせについては、拙稿「こころの内は外—ソクラテスの対話の現実」（前掲『ロゴスと深淵』）、三〇—三五頁参照。
- (13) 「異化作用」については、宮本久雄『福音書の言語宇宙』岩波書店、一九九九年、七一—一六六頁参照。
- (14) プラトンにとって「ソクラテス追悼の言葉」は、メネクセノス自身がソクラテスの最期の場にいたとされる（59b6）『パイドン』であろう。しかしその言語性格と追悼の意義は別箇考察されるべきである。